

恋愛関係におけるストーキング・つきまとい 行動の予測と対処に関する研究

越智, 啓太 / OCHI, Keita

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

5

(発行年 / Year)

2019-06-07

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 (共通)

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 元 年 6 月 7 日現在

機関番号：3 2 6 7 5

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016 ~ 2018

課題番号：1 6 K 0 4 3 8 6

研究課題名 (和文) 恋愛関係におけるストーキング・つきまとい行動の予測と対処に関する研究

研究課題名 (英文) Research on prediction and coping of stalking in romantic relationship

研究代表者

越智 啓太 (OCHI, Keita)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：4 0 3 3 8 8 4 3

交付決定額 (研究期間全体) : (直接経費) 3,100,000 円

研究成果の概要 (和文) : 本研究では、恋愛中のカップルを追跡調査し、彼らの恋愛が終了した後のつきまとい・ストーキングを予測する要因について調査を行った。1000組のカップルを2年間にわたって継続して調査し、314組のカップルについて最後まで追跡できた。このうち、104名が2年間の間に交際が終了した。これらのカップルにおける交際終了後のつきまとい・ストーキングの程度を測定する尺度を作成した。この尺度の得点には性差や交際ステータスは影響していなかった。しかし、交際相手のギャンブル癖や社会的剥奪傾向がストーキング行動を予測することがわかった。この結果を基にして、交際終了時のつきまとい・ストーキング行為を予測する式を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

恋愛関係にあるカップル間における暴力やハラスメント行為は現在大きな問題となっている。しかし、配偶者間における暴力であるいわゆるDV (ドメスティックバイオレンス) と比べ、その現状はあまり明らかになっておらず、また、「いやなら別れば良いだけ」として軽く扱われることも少なくない。そこで、本研究においては、恋愛関係におけるカップル間のデートバイオレンス・ハラスメントのうち、つきまとい・ストーキングの問題に焦点を当て、これらの行動の現状を調査するとともに、その予測要因を明らかにした。また、これらの研究成果について、学生相談や女性相談機関を対象にプレゼンテーションを行い、研究成果の社会的実装を行った。

研究成果の概要 (英文) : In this study, we traced out couples in love and investigated the factors that predict stalking behavior after their end of love. One thousand couples were surveyed continuously for two years. I could track to the end of the 314 couples. Of these, 104 people had their love relationship closed in two years. A psychometric scale was developed to measure the extent of the stalking after the end of dating in these couples. Gender and dating status did not affect the score on this scale. However, it turned out that the partner's gambling habit and social deprivation tend to predict stalking. Based on this result, I made a formula to predict the stalking behavior at the end of the relationship.

研究分野：犯罪心理学

キーワード：デートバイオレンス ハラスメント ストーキング つきまとい行為 恋愛関係 学生相談 DV 男女
共同参照

1．研究開始当初の背景

「ストーキング規制法」が法制化されてから、15 年がたつが、ストーキングや悪質なつきまとい行為は増加の一途をたどっている。警察統計では、毎年全国で 2 万件以上の被害が報告されているし、被害者調査をすると警察に申し出られないはるかに多くのストーカー被害が存在していることがわかる。恋愛関係における二者関係間でみられるハラスメント行為、いわゆるデートバイオレンスにおいてもつきまといはそれなりに大きな比率を占めている。このストーカーの問題は、三鷹ストーカー事件、西海ストーカー事件などしばしば、殺人事件など取り返しのつかない事態に発展することもあり、また、ストーカー被害者の苦悩や恐怖は非常に大きなものであり、引っ越しや退職、退学を余儀なくさせてしまうことも少なくない。特に問題なのは、恋愛関係にある二者関係において、恋愛崩壊後に発生するストーキング行為であり、Mullen & Pathe(1994)や我々の調査によれば、このタイプのストーキングがもっとも危険で、問題も大きなものである。

この種のストーキング事案は、警察の相談窓口はもちろん、大学の学生相談室や、カウンセリング場面にも持ち込まれることが少なくない。ところが実際のところ、われわれはこのようなケースにどのように対処していけば良いのか、明確な指針を持っていない。それはそもそもストーキングの発生要因やメカニズムが明らかになっておらず、対処方法についてもエビデンスにもとづいた指針が存在しないからである。これはわが国に限らず、北米やヨーロッパでも同様なことがいえる。

我々の研究室では、身体的暴力や心理的虐待などのデートバイオレンスの発生メカニズム、発生の予測、対処の方法について検討してきたが、他のタイプのハラスメントに比べ、ストーキング被害はその発生メカニズムは複雑であり、対処も困難であることが示されている。しかしながら、この問題を解決しないことはデートバイオレンス対策にとっては最も大きな問題のひとつを放置することになってしまう。そこで今回の研究では、この問題に焦点を絞って、多数の交際中のカップルの長期追跡調査などの手法をもちいて、恋愛の進行崩壊とストーキング・つきまとい行動の発生をダイナミックに捉えながら、このメカニズムと対処方法について明らかにしようと考えている。

2．研究の目的

（1）ストーキング行為と関連する交際パターン、パーソナリティパターンの把握

本研究では、おもにカップルの追跡調査をもちいて、ストーキング・つきまとい行動と関連する交際の前兆行動、交際相手のパーソナリティ特性を把握し検討する。対象となるのは、1000 組のカップルであり、彼らを 2 年間にわたって追跡調査する。2 年間に 3 回の調査を行い、現在の交際状況、ストーキング・つきまとい型ハラスメント尺度を含む、デートバイオレンス・ハラスメント尺度（越智,2015）、交際相手の性格特性などを測定するパーソナリティ関連の尺度（自己愛傾向、共感性などの尺度を交際相手に他者評定させる）、交際期間中の各種イベントについての調査、職業、嗜好などについての調査を行う。また、補足的にカップルに対する継時的面接調査を行った。大学生カップル 20 組を 3 年間にわたって追跡し、合計 3 回の半構造化インタビューを行って、交際のステータスやストーキング、つきまといの発生状況について調査を行った。これは、1000 組のカップルの追跡調査を質的な面から補強するための情報収集としての意味を持っている。

（2）つきまとい・ストーキングを測定する尺度の作成

上記の方法論によって、まず、カップル間におけるつきまとい・ストーキングの程度を測定するための尺度を作成する。この尺度の得点を元にして、以下の予測研究を行う。

（3）ストーキングの可能性、危険性を推定する数式の作成

上記の結果を踏まえ、交際パターンや相手方、自分の属性、パーソナリティ特性などから、ストーキングの可能性、及びストーキングが暴行、傷害などの比較的深刻な被害につながる可能性について予測する式を作成する。

（4）ストーキング危険性チェックシート、対処のためのガイドラインの作成と社会的実装

上記の結果を踏まえ、ストーキングの危険性予測チェックシート、対処のためのガイドラインを作成する。

3．研究の方法

あらかじめ調査会社のデータベースに登録されている調査協力候補者の中から、現在異性と交際している全国の 18 歳～39 歳までの未婚の男女 1000 名（男性 500 名、女性 500 名）を調査対象としてウェブ調査を行った。調査に関する概要説明、データの使用方法などについての説明文書を呈示し、調査対象となることに同意したもののみに対して調査を行った。この手続きは第 1 回、第 2 回両方で同様な方法で行われた。第 1 回調査は平成 28 年 12 月に行われ、交際の状況や期間、自分や交際相手の属性に関する質問に回答させた。その後、1 年間の間隔を置き、平成 29 年 12 月に第 2 回調査、2 年間の間を置き、平成 30 年 12 月に第 3 回目の調査を行った。第 1 回目から第 3 回目の調査すべてに参加したのは、349 名（男性 224 名、女性 125 名）であった。彼らのうち、245 名は 2 年間にわたって交際継続中であった。2 年間の間に交際が終結したと報告したのは 104 人であった。

なお、調査は(株)クロス・マーケティングに委託して行った。回答はおおむね5～15分程度で行われた。参加者はこの調査に回答することでのちに商品などと交換することが出来る一定のポイントを得ることが出来た。なお、カップルの面接調査などから得られた情報ももちいて、第2回調査、第3回調査の質問項目などについて若干の変更を行った。ただし、本報告書では全ての同じ項目で質問した部分について、おもに分析の対象とした。

4. 研究成果

(1) 交際終了後のつきまとい・ストーキング尺度の構成

2年間の追跡期間に於いて交際が終了した104人について本研究では分析対象とした。分析対象者は、男性64名、女性40名、平均年齢は、29.46歳(s.d. 6.63)、男性30.87歳(s.d. 6.44)、女性27.20歳(s.d. 6.37)であった。分析対象者には、交際終了の態様についての質問と交際終了後のつきまとい・ストーキング尺度が実施された。「交際終了後、家などに押しかけてくることがあった」、「交際終了後、以前にあげたプレゼントを返せといわれた」など26項目からなる交際終了後のつきまとい・ストーキング尺度を構成し、調査対象者に「まったくなかった(1)」、「ほとんどなかった(2)」、「すこしあった(3)」、「何回かあった(4)」、「よくあった(5)」の5段階で評定させた。各項目ごとの平均評定値をTableに示す。

全ての項目で「まったくなかった(1)」と答えたものを除いたところ、34名(男性22名、女性10名)が該当した。これが実質的には交際終了後のつきまとい・ストーキングの被害者ということになる。つまり、今回の調査対象者において、交際終了時にすくなくとも1項目でつきまとい・ストーキングに該当する項目の被害を受けた割合は、32.7%(男性34.4%、女性25.0%)であった。

次にこの交際終了後のつきまとい・ストーキング尺度について因子分析を行った。因子分析は、重みづけのない最小二乗法で行なった。因子の抽出は固有値1の基準で行った。その結果、削除される項目はなく、全項目からなる1つの因子のみが抽出された。この因子は全体の分散の82.78%を説明した。係数は0.992となった。この結果より、交際終了後のつきまとい・ストーキングには、加害者が行う行為の種類によるサブタイプは存在せず、1つの尺度でその程度が測定可能であるということがわかった。

(2) 交際終了後のつきまとい・ストーキング尺度の分析

次に上記で構成された交際終了後のつきまとい・ストーキング尺度26項目の合計点について分析を行った。この尺度の得点は26点から113点までに分布しており、平均点34.30、標準偏差18.59、標準誤差1.82であった。歪度は2.43、尖度は5.18で分布としては最低点に偏った分布となった。これは、交際終了後につきまとい・ストーキングを全く受けていないものが最も多く、被害が大きくなるに従って人数が少なくなることを示していた。次にこの尺度の得点の性差について分析した。その結果、 $t(99.108)=1.540$ となり、男女に有意な差は存在しなかった。つまり、男性と女性はほぼ同様の頻度でつきまとい・ストーキングの被害を受けていることがわかった。また、別れてからの期間を2年前、1年前、半年前、最近に分類させ、つきまとい・ストーキング尺度得点の関連をみたところ、得点は29.6(s.d.10.5)、28.15(s.d.5.97)、40.48(s.d.23.07)、41.23(s.d.26.75)となり、一元配置分散分析の結果、 $F(3,100)=3.862$, $p<.012$ となった。この結果は交際終了直後はつきまとい・ストーキングが比較的発生しやすいが別れてからの期間が経過するに従ってその頻度は低下する、ほぼ1年程度でこれらの被害が大きく減少するということを示している。次に交際終了の形態とつきまとい・ストーキングの関連について分析を行った。交際終了の形態を、自分から切り出した、相手から切り出した、話し合っただけ、何となく別れたの4種類に分類させ、それぞれでつきまとい・ストーキング尺度の得点に違いがあるかを一元配置分散分析で分析したところ、 $F(3,100)=0.220$, n.s.で有意な差は検出されなかった。これは別れ方とつきまとい・ストーキングに関連がないことを示している。さらに交際終了時の感情とつきまとい・ストーキングの関連について分析した。交際終了時の感情を測定する尺度は開発されていなかったため、まず本研究において、これらの尺度の構成を行った。交際終了時の感情について、「傷ついた」、「せいせいした」、「くやしかった」などの12項目について「非常に良く当てはまる(7)」～「まったくあてはまらない(1)」まで7段階で評定させ、これを因子分析した。因子分析は、重みづけのない最小二乗法、因子の抽出は固有値1、回転はプロマックス回転で行った。その結果、第2因子までで全体の67.12%の分散が説明され、2つの因子が抽出された。第1因子はネガティブな感情、第2因子はポジティブな感情の因子であった。このようにして構成された尺度とつきまとい・ストーキング尺度の相関係数を算出したところ、ネガティブ感情の間には $r=.036$ 、ポジティブ感情の間には $r=.080$ の相関が見られたが、いずれの相関も無相関検定で有意にはならなかった。つまり、交際終了時の感情はつきまといやストーキングの行動を予測しないということがわかった。

(3) 比較的シビアなつきまとい・ストーキングを受けている被害者の分析

上記の尺度において、合計点が52点以上のものを比較的シビアなつきまとい・ストーキングを受けている被害者として抽出した結果、14人が抽出された。このうち男性は11名、女性は3名であった。この結果は非常に興味深いといえる。一般にはストーキングの加害者は男性、被害者は女性が多いと指摘されており、実際に警察等の相談件数でもそのような結果になっているのだが、本研究の結果はこれが逆転しており、女性が加害者、男性が被害者のケースが多くなっているからである。この点については、暗数の問題などが絡んでいると思われるが、今後

注意深く検討していくことが必要な問題であろう。これらの 14 人について性差を分析した結果、 $F(1,12)=0.255$, 交際終了期間との関係は $F(3,10)=1.615$, 交際終了形態との関係は $F(3,10)=.087$ でいずれにも有意な差は存在しなかった。また、交際終了時の感情との関連もネガティブ感情で $r=0.265$, ポジティブ感情で $r=0.214$ でいずれも有意な相関は検出されなかった。

(4) 交際終了後のつきまとい・ストーキングと関連している要因

交際終了時のつきまとい・ストーキングを予測する要因について検討した。これは交際時のさまざまなステータスから、交際終了時のつきまとい・ストーキングの頻度を統計的に予測できないかという試みである。

まず、交際終了時のつきまとい・ストーキング尺度の得点と交際相手の属性変数についての単純相関について分析した。その結果、多くの属性は、つきまとい・ストーキングとの間に関連が見られなかった。例えば、飲酒 ($r=0.134$)、喫煙 ($r=0.124$)、スポーツ ($r=0.115$) などである。しかしながらギャンブルとの間には比較的高い相関が見られた ($r=0.383, p<.01$)。

つぎに交際のステータスとの関連について分析したが、これに関しても有意な相関が見られるものは少なかった。例えば、交際から感じている幸福感 ($r=.031$)、交際時の力関係 ($r=.012$) など関連を持たなかった。ただし、デート頻度との間には負の有意な相関があり、デート頻度が少ないほど、つきまとい・ストーキング行動が多くなることがわかった ($r=-0.270, p<.01$)。

さらに、交際相手の性格評定値との間の相関について分析した。その結果、攻撃置き換え傾向 ($r=0.204, p<.05$)、怒り持続傾向 ($r=0.216, p<.05$)、情緒不安定性 ($r=0.201, p<.05$)、身体的攻撃 ($r=0.245, p<.05$)、敵意 ($r=0.259, p<.01$)、間接攻撃 ($r=0.243, p<.05$)、シャイネス ($r=0.199, p<.05$)、対人不安傾向 ($r=0.239, p<.05$)、対人恐怖傾向 ($r=0.203, p<.05$)、社会的剥奪傾向 ($r=0.302, p<.01$)、権威主義 ($r=0.225, p<.05$)、マキアベリアリズム ($r=0.254, p<.05$) の各尺度が交際終了後のつきまとい・ストーキングと関連していることがわかった。

(5) 交際終了後のつきまとい・ストーキングを予測する式の作成

次に交際時のステータスや交際相手の性格に対する評定値から、交際終了後のつきまとい・ストーキング行動が予測できるかどうかについて検討した。つきまとい・ストーキング尺度の得点を従属変数、交際時の各ステータスを独立変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、ギャンブル癖、社会的剥奪傾向、デート頻度の 3 つの変数によって $R=0.512, R^2=0.263$, 調整済み $R^2=0.238$, 推定値の標準誤差=16.85 の重回帰式を導くことができた ($F(3,91)=10.84, p<.01$)。選択された 3 つの変数のうち、もっとも大きかったのはギャンブル頻度であった。同様の方法論で、ロジスティック回帰分析、機械学習等で予測を行ったがほぼ同様の結果が得られた。

さらに交際終了後のつきまとい・ストーキングがなかった調査参加者を除いた参加者に対して、同様のステップワイズ法による重回帰分析を行ったところギャンブルのみが独立変数として選択され、 $R=0.414, R^2=0.171$, 調整済み $R^2=0.140$, 推定値の標準誤差=23.34 の重回帰式を導くことができた。

(6) ストーキング危険性チェックシート、対処のためのガイドラインの作成と社会的実装

上記の結果からみると、興味深いことに交際中のステータスからある程度のつきまとい・ストーキングを予測することができるということがわかる。しかも、それは、交際相手の性格評定や交際の状況よりも交際相手がギャンブルをしているかによって左右されるということがわかった。ギャンブルの背景にはある種の粘着的な性格要因が関係しており、それが結果としてつきまとい・ストーキングを引き起こしている可能性がある。しかし、このメカニズムについては今後さらに検討していくことが必要であろう。これらの結果から、交際相手のギャンブル癖、社会的剥奪傾向、デート回数に関するチェックシートを作成した。これは、交際終了後のトラブルを予測するためのスクリーニングとして使用できると考えられる。以上の結果について、実際にデートバイオレンス、ハラスメントへの対応を行っている実務者に向けてのプレゼンテーション資料を作成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1, 越智啓太 (2019) 恋愛関係における追求 - 後悔尺度の作成と分析 - 恋愛マキシマイザーと恋愛サティスファイサー - 法政大学文学部紀要, 78, 185-194. (査読無し)

2, 下島裕美, 佐藤浩一, 越智啓太 (2017) 日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) の構成概念妥当性の検討 杏林大学研究報告 教養部門 34, 35-44. (査読無し)

<https://ci.nii.ac.jp/naid/40021216399/>

3, 越智啓太, 甲斐恵利奈, 喜入暁 (2016) 多面的嫉妬尺度の作成とデートバイオレンス・ハラスメントの関連 - 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(4) 法政大学文学部紀要, 74, 119-127. (査読無し)

https://hosei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13660&item_no=1&page_id=13&block_id=21.

〔学会発表〕(計 3 件)

1, 越智啓太 (2018) デートハラスメントの対処方略とその有効性 犯罪心理学会第 53 回大会 (奈良県文化会館)

2, 越智啓太(2018) 恋愛マキシマイザーは恋愛不幸か? 社会心理学会第 59 回大会 (追手門学院大学)

3, 喜入暁・越智啓太(2017) Dark Triad の短期配偶は配偶者保持行動に媒介される 日本心理学会第 81 回大会 (久留米大学)

〔図書〕(計 2 件)

1, 越智啓太(編)(2018) 意識的な行動の無意識的な理由 ビジュアル認知心理学百科 創元社

2, 越智啓太・桐生正幸(編)(2017) テキスト司法・犯罪心理学 北大路書房

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。